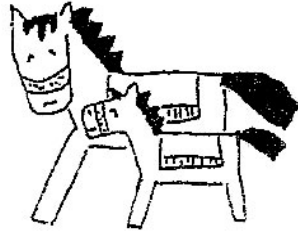


♪  
お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく〜

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと

30年 4月 NO.281



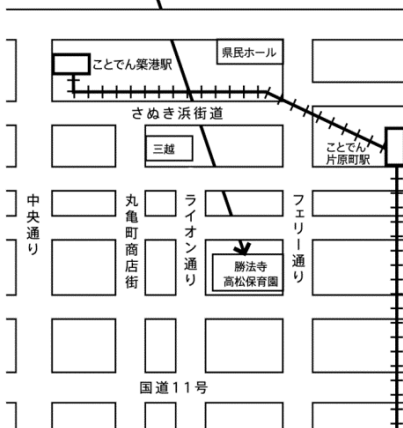
〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		4月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
4月 11日	水	香川みすゞさんの会 9:30～14:00	屋島の頂上でウォーキングします。 9時半までに琴電屋島駅集合。 (弁当・水筒・タオル・折りたたみ傘要) 雨天時は高松保育園にて14時より。
4月 13日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「春のよろこび」をテーマに大型絵本や エプロンシアター、手話ソングなどあります。
4月 14日	土	体験保育 10:00～12:00	同じクラスに入って、お友だちと いっしょに遊びましょう。
4月 21日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。
4月 21日	土	おとなアート 14:00～16:00	貝殻の質感と形を自分なりにフォト フレームの中に作りあげていきます。 どなたでもどうぞ。(予約要4/16まで)
4月 25日	水	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師(小児科医)にゆっくり 相談できます。(予約要)

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して いますので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)	育児相談(月～土) 9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活 入園・見学についての相談もどうぞ。
--	---

香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話全集  
「空のかあさま・下」  
JULIA 出版局

註「さんさん笹山お猿が一匹手をたたく  
一つ手を拍(う)つ。」

紙ふうせん  
紙ふうせんのは、手をたたく  
紙ふうせんのぼる空。  
絹の旗雲、羽の雲、  
柳のような、枝の雲。  
「さんさん笹山」その唄の  
猿もさんさん、笹山で、  
お手々たのたいて春の日を、  
みなでたのたいて春の日を、  
ひとりあそびもお日は、  
ひとりあそびも春の日は。



☆今月の内容 — 「絵本を読み聞かせる大切さ」佐々木 正美 (児童精神科医)

# 絵本を読み聞かせる大切さ

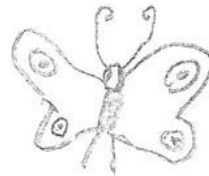
佐々木 正美（児童精神科医）

子どもの「心」を育てるために、親としてもっとも大切な日々の営みは、「食事」への気遣いと、そのときの家族の団欒です。

いま、学校でのいじめが年々深刻になったり、思春期に向かって万引きなどの非行が増加の一途をたどるなど、子どもたちの育ちの劣化が止まらないことに、私たちはどれだけ真剣に向き合おうとしているのでしょうか。

子どもの教育の第一歩が、家族における教育だということは疑いないことなのに、そのことからどうしてこんなに目をそむけていられるのでしょうか。

日々の食事の用意に、お金や時間ではなく、心を使うことが、どれほど子どもや家族の精神保健に大切なことか、その心遣いだけで子どもは健全に育つのですと伝え続けて40年になります。そしてもう一つ、子どもの「心」の健全な発達のために大切なこと、それは、誰でもいいのですが、相手と「喜びを分かち合う」経験です。



## 喜びの共有と情緒発達

19世紀から20世紀にかけて活躍したフランスの発達心理学者H・ワロンは、優れた研究観察の結果、乳児がすでに4、5ヵ月ごろから、自分に喜びを与えてくれる養育者（母親）が、その行為を、喜びを感じながら行なってほしいと望んでいることを、明らかにしました。

子どもは、乳幼児期から、母親といっしょに喜び合いたいのです。自分ひとりで喜んでいることなど、本当の喜びではない、相手（他者）といっしょに喜びを分かち合ってこそ、初めて本当の人間的な喜びになることを、本能的に実感している。そのことをワロンは、乳児を精密に観察することで発見しました。

さらに彼は、喜びを分かち合う経験のなかで、子どもは他者とコミュニケーションをとる力を身につけ、人間的な情緒発達の基盤が育てられることも知りました。

## 一心同体の経験

幼い子どもに、優れた絵本を読み聞かせるもっとも大切な意味は、この、喜びを分かち合う体験にあります。

母親が、自分の膝に幼い子どもを前向きに座らせ、子どもの背中が自分の胸とふれあうように両腕を抱え込んで、両手にもった絵本を子どもの目の前にひろげて、読み聞かせは始まります。

絵本を読んでやっているときは、子どものためというよりも、母親自身が絵本の世界に入り込んでしまうことが、子どもに、より大きな感動を与えるでしょう。いっしょに絵本の世界にひたるのです。そんな「一心同体」の世界で、子どもは母親の声で絵本の文章を聞き、母親の指先で教えられるように絵本の絵を見ていきます。

40余年の長い歳月、児童精神保健や精神医学の臨床の仕事をしている私が深く思うのは、人生の早期に母親や家族と、このような一心同体的な体験をもてなかった子どもたちが、その後の人生にどれほど負の結果を経験することになるか、ということです。

そういう子どもたちは、児童期、思春期、青年期を通じて、本当の親友がなかなかできません。安心して心を通わせあう友だちができないのです。

## 言葉とイメージと考える力

人類は必ず言葉を持っているといわれます。文字を持っていなくても、話し言葉は必ず持っています。

言葉は文化そのものです。そして、イメージを持っています。その言葉とイメージによって、私たちは物事を考える力、すなわち生きる力を与られます。子どもにとって絵本は、その言葉とイメージを、もっとも豊かに育んでくれるものです。

まだ文字になじむ前から、読み聞かせられた言葉やイメージとしての絵が、成長したとき、具体的な実体験としての記憶に残っていないように思われるかもしれません。しかし、そうではありません。人間的な人格の基本要素と



して、それらがどれだけしっかりと心の奥深く根づいているものかを、近年の乳幼児心理学や精神医学の研究者たちは明確に解き明かしてきました。

たとえば生後6ヵ月から2歳くらいの乳幼児が、這い這いやよちよち歩きで動き回りながら、ふと不安になって振り返ったとき、いつも自分を見守ってくれていたはずの母親や養育者がいなかったことが、その子が成長したときに人格障害を起こしたり、非行や犯罪に走りやすくなる重要な要因だったりするのです。



### 言葉と絵の世界を分かち合う

私たちは本来、相手と喜びや悲しみを分かち合うことを求めて生きる存在です。ですから、誰か相手に喜びを与えていることが、自分にとっても喜びであるように、自分の悲しみを共有してくれる人に恵まれることを、大きな幸せと感じます。

それなのに、私たちはいま、知らず知らずのうちに、自分の喜びにしか関心を示さない利己的な傾向を強めながら生きています。しかも、そのことを忘れがちです。

こんな時代ですから、幼い子どもを自分の胸のうちにしっかりと抱き、言葉と絵の世界を共有しあう一心同体の時間を、もっともっと取り戻したいと思います。

そして、子どもの目や表情がいきいきと輝いて、胸の鼓動が高鳴ることに、読み手の私たちも感動や喜びを感じたいと思います。

それは、何より子どもたちに、将来、誰とでも喜びや悲しみを分かち合える人格を育ててやりたいからです。思い出すのは、以前みた「喜びも悲しも幾歳月」という映画です。灯台守の主人公は、妻にこういうのです。

「誰も知っててくれなくたっていいじゃないか。俺の苦労はお前が知ってる。お前の苦労は俺が知っているよ」そんな夫婦愛を描いた、感動的な映画でした。

「抜萃のつづり その71」より

